



TITLE:

第75回岐阜外科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

第75回岐阜外科集談会. 日本外科宝函 1975, 44(6): 498-500

ISSUE DATE:

1975-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/208095>

RIGHT:

choriocarcinoma 混在する germinal tumor を経験したので報告した。

症例は20才男性、右睪丸無痛性硬化及び左鎖骨上窩腫瘤を主訴としたが、 α -fetoprotein 高値及び、妊娠反応陽性を示す以外の検査成績には異常を認めなかった。

睪丸リンパ管造影にて、後腹膜リンパ節転移像を認めた。除睪術、リンパ節廓清術を施行したが、完全摘術は不能であった。放射線療法は施行せず、Methotrexate、Actinomycin D 等化学療法にもかかわらず、入院6ヶ月にて死亡した。

第75回岐阜外科集談会

日時：昭和49年7月30日午後5時30分

場所：岐阜大学病院基礎5階講堂

1. 両側尿管皮膚瘻術後にみられた Sepsis の1例

岐大泌尿器科

土井達朗，清水保夫
河田幸道，西浦常雄

2. 女子尿道形成術の1例

岐大泌尿器科

堀江正宣，坂 義人
河田幸道，西浦常雄

3. Malignant hyperpyrexia の1 Case について

岐大麻酔科

棚橋 順一

欧米、本邦でもかなり報告例がふえている。私共の教室で高熱、次いで心停止を来した症例を経験したので報告する。

Malignant hyperpyrexia の原因については全く現在不明であるが、Zsigmond 及び Denborough 等の遺伝因子との関係、Britt, Kalow等のある薬物がOxidative phosphorylation の過程で uncoupler として作用するものだとする知見が重視されている。

治療は対症処置以外無いと言われており、従って全身麻酔中の体温測定を必須とし、本症を来す家系にCPKの高値を示すことより、術前のCPKの測定を必須とたい。

4. Albright syndrom の1例

岐大第2外科

香川泰生，大熊晁夫，坂井 昇
山田 弘，坂田一記

5. 心臓局所冷却法による開心術の経験

国立療養所岐阜病院外科

石原 浩，小林君美，井上律子
加藤康夫，中納誠也，山里有男

開心術中の心筋保護の手段として、心臓局所冷却法がある。Griep らは本法を多数の臨床例に用い、良好な成績を得ている。我々も本年5月以来、本法を用いて8例の開心術を行い、きわめて良好な成績を得ているので報告する。症例はTOF 1例、VSD+TCRV 2例、MVR 4例、ECD 1例の計8例である。手技は人工心肺完全灌流後、心臓に4℃の生食をかけ、心筋温が15℃前後で心切開を加え心内操作を開始する。心内操作終了後は、大動脈遮断を解除する前に熱交換器にて加温すると、遮断解除とともに自発的拍動が得られる。十分な拍動が得られぬ場合は、心マッサージ、カウンターショックを行えば容易に心拍動が得られる。我々の大動脈遮断時間は40～96分である。いずれの症例も術後経過は良好で、心筋障害によると思われるような合併症は認めていない。

6. 最近経験した右室2腔症の2例について

国立療養所 岐阜病院外科

山里有男，小林君美，井上律子
加藤康夫，中納誠也，石原 浩

最近、我々は、右室2腔症+心室中隔欠損症の2例を、術前に診断し、手術により確認し根治せしめ得たので、若干の文献的考察を加え、診断、および治療の要点について述べた。本症診断に際し、その特有な臨床像は少く、右心カテーテル法、右心造影法は、診断上、極めて有用である。

本症の異常筋束は加齢とともに肥大し、圧較差を増

大させるという報告もあり、早期の根治手術が必要と考える。

我々は、これまでに本症を5例経験しており、以前考えられていた程稀な疾患とは言えないようである。

7. 術前診断をなし得た左房粘液腫の1例

岐大第1外科

鬼束惇義, 広瀬光男, 村瀬恭一
馬場瑛逸, 小川隆司

症例は47才の男性で主訴は咳嗽, 起坐呼吸, 心悸亢進, 呼吸困難である。胸部単純X-pにて右第Ⅱ弓, 左第Ⅱ弓, 第Ⅲ弓の軽度突出あり, ECGでは sinus rhythm で LVHがある。PCGではI音は亢進し, それに続き early systolic sound を認める。II音の後に tumor plop があり, その前後に middle pitch の diastolic murmur それに続き rumble を認める。UCG ではDDRの遅延, 左房に tumor echo を認め, tumor の左房室間移動を証明した。右心カテテルではPA圧 50/24mmHg であり, 肺動脈造影では左房は拡大し収縮期にて左房に陰影欠損を認め, 拡張期にて左室側へ移動を示した。S49年6月21日, 体外循環下に摘出術を施行。腫瘍は6×5×3.5cm, 重さ41g で有茎性である。茎は僧帽弁後交連近くの弁輪直上部, 中隔側にあった。術後経過は良好である。

8. 動脈塞栓症の外科的治療

岐大第1外科

小川隆司, 清水幸雄, 馬場瑛逸
村瀬恭一, 広瀬光男

9. 退行性髄膜瘤と思われた小児頭頂部腫瘍の2例

岐大第2外科

細野芳雄, 阿部達彦, 大熊晨夫
樫木良友, 山田 弘, 坂田一記

10. 下血を主訴とした十二指腸平滑筋腫の1例

岐大第1外科

松本興治, 名知光博
後藤明彦

白鳥病院外科 小川 孝一

症例: 65才女子。主訴: 下血
既往歴および家族歴: 特記すべきことなし。
現病歴: 本年5月13日, 山へワラビをとりに行き過

食した。翌朝より大量の下血(タール便)をきたし, 眩暈および心悸亢進をきたすようになり, 16日に入院した。

現症: 体格中等, 栄養良, 眼瞼結膜に貧血をみとめる。腹部では右季肋下に軽度の圧痛をみとめる。

検査所見: 著明な貧血と白血球数増多をみとめ, 血清総蛋白量も4.8g/dlと低い。

手術所見: 術前に3600mlの輸血を施行し, 開腹すると十二指腸下行部より水平部への移行部にクルミ大の腫瘍を触れ, 末梢の十二指腸, 小腸内に多量の血液を透見した。下行部で切開すると内側壁より発生したクルミ大で表面平滑, 易出血性の腫瘍をみとめた。腫瘍を切除し十二指腸を閉鎖した。摘出標本は4×3.5×3cmの半球形のやゝ軟, 断面はかっ色で実質性であった。病理組織診断は平滑筋腫で悪性像を思わせる所見はみとめなかった。術後経過は良好である。

11. 診断に難渋した小児腹部悪性奇形腫の1例

岐大第2外科

種村廣己, 河田 良, 佐治董豊
樫木良友 国枝篤郎

12. 肛門より脱出せる若年性(小児直腸)ポリープの1例

養老中央病院外科

宮本亮一, 名知光博, 関野昌宏

結腸における若年性ポリープは外国に於てはかなりの症例報告がみられるが, 本邦における報告例は少なくその1例を経験したので報告する。症例は5才5ヶ月になる女児で腫瘍の肛門外脱出を訴え来院。家族歴既往歴に特記すべきことなし。排便時腹部に力を入れたところ肛門より小鵝卵大の暗赤色の腫瘍が飛び出しているのに気づき来院。昨年7月頃より血便に気づいていたが排便時疼痛, 下痢, 便秘等は認めておらず今まで腫瘍の肛門脱出には気づいていない。体格中等度, 栄養普通で全身状態は良好であった。腫瘍は肛門輪より約6cm口側の直腸前壁より脱出せる有茎性腫瘍で2.8cm×2.8cm×2cmの卵円形で弾性軟で暗赤色を呈しており表面は大体平滑で一部壊死を伴っていた。断面も同様暗赤色を呈して大小の嚢胞を認めた。組織学的にも若年性ポリープの像を示していた。経肛門的に切除後, 直腸鏡, 注腸造影施行するも他に腫瘍らしきものは認めなかった。

13. 最近5年間の結腸癌についての検討

岐阜市民病院外科

○渋谷智顕, 堀部 康, 高井 清一
伊藤隆夫, 田中千凱, 松村幸次郎
島田 脩

昭和44年から昭和48年までの5年間における当該施設での結腸癌について調査したので報告する。過去5年における直腸癌56例に対し結腸癌46例で、発生年齢は直腸癌が60代に最も高発したのに対し結腸癌は50代が最高で、最低年齢33才、最高年齢86才であった。性別では、結腸癌、直腸癌共に男子にやや多く、結腸癌の発生部位はS字状結腸が最も多く過半数を占め以下、上行結腸、盲腸、横行結腸の順序で多発性が1例あった。初診時診断(術前診断)は結腸癌としたもの40例で以下、イレウス4例、虫垂炎、胆のう炎各々1例で診断法は注腸透視、結腸鏡によった。結腸癌の初発症状、初発症状から手術までの期間、手術方法、吻合法、術後合併症、腸瘍の分類等について報告した。

14. 胆石イレウスの1例

岐阜市民病院外科

松村幸次郎, 堀部 康, 高井清一

異物嵌頓による腸閉塞のうち、胆石イレウスは、比較的稀な疾患であり、本邦イレウス症例12,614例を調べた岡田らの集計では、6例(0.05%)にすぎない。本症の成因は、胆嚢炎に起因する胆嚢腸管癒によるものが大部分で、このうち胆嚢十二指腸癒によるものが最も多いが、我々は、最近、自然胆道より排泄された胆石により、イレウスを来たしたと思われる症例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。患者は、腹部膨満を主訴として来院した、68才の男性で、術前の注腸透視にて、回腸末端部に結石像を認め、開腹手術にて同部に嵌頓していた、くるみ大の胆石を剔出したが、胆嚢内に、結石を触知したものの、胆嚢腸管癒は認められなかった。剔出結石は、大きさ約3×3×2.5cm、重さ約14gにて、コレステリンを主成分とするものであった。なお本症例では、胆石や胆嚢炎を思わしめる既往が全くなく、2の点も非常に興味深い次第である。

文 献

- 1) 岡田耕平：日医大誌 24：370 1957
- 2) 篠原幹男：外科治療 119-1285 1971

第76回岐阜外科集談会

日時：昭和49年10月29日午後5時30分

場所：岐阜大学病院新外来棟4階講堂

1. 口峽咽頭部に発生した大きな多形性腺腫の2症例

岐阜大口腔外科

三浦隆司, 高橋利典, 小島孝司
清水 徹, 阿部輝夫, 永瀬英樹
立松憲親, 岡 伸光

唾液腺腫瘍は大小唾液腺部に比較的多く発生する腫瘍であり、多様な組織像を呈する腺腫瘍である。当腫瘍の分類、発生機序および悪性度などについて病理学者の間では現在なお論議されている。

今回私達は口峽咽頭部に発生した小口腔腺由来の大きな多形性腺腫の症例を相次いで2症例経験した。2症例とも60才女性であり、摘出腫瘍の大きさは7×5×5cmと5×5cmと5×4×4cmであった。その内の1症例は腫瘍内に粘液様内容物25mlを貯留し

た文献上も非常に稀なものに遭遇したので病理組織学的所見および考察を加え報告した。再発については現在なお経過観察中である。

2. Cronkheit-Canada症候群の1例

松波病院科外科

○松波英一, 松浦昭吉
吉田敏生, 和田英一

遺伝性が無く、脱毛、皮膚色素沈着、爪の変形脱落、位蛋白血症と広範な消化管ポリポージスを来す疾患を1955年 Cronkheit と Canada は報告したが我々は此の症候群に極めて類似した1例を経験し開腹し確診を得る機会を得たので報告する。症例：43才男子、家族歴、既往症に特記すべきものなし。本年5月頃より下痢、下血、爪の変形、顔面、手、足背部の皮膚色